

北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査

山内良祐 考古学分野・専門 博士前期課程2年

本報告書は2018年度名古屋大学大学院人文学研究科フィールド調査プロジェクトによる助成のもとで行った「北陸における縄文時代の下呂石利用状況調査」の成果を述べるものである。

縄文時代の石器に用いられる石材には広範囲で利用されているものがある。このような石材は自然の力のみで広範囲に拡散したとは考えられず、そこには人の手による運搬という力が働き、石材が移動していると考えられる。東海地方を中心として石鏃などの利器に用いられていた下呂石もそのような石材のうちのひとつである。下呂石とは岐阜県下呂市で産出するガラス質の岩石であり、東海を中心として石鏃など小型剥片石器に多く用いられている石材である。この下呂石は河川などの自然の力が及ぶ範囲を越えて利用されており、今回対象とした北陸もそのような地域である。このような地域の状況を調査し、石材利用状況を検討することにより、当時の地域間関係、そして社会について復元を試みる。

今回は肉眼観察により対象遺物の石材判別を行い、遺跡ごとの石材利用割合の分析や、流入形態の検討を行った。具体的には境A遺跡（富山県朝日町）、米泉遺跡（石川県金沢市）、御経塚遺跡（石川県野々市市）、小杉遺跡（石川県加賀市）から出土した資料を実見し石材判別を行った。また、下呂石製の石器を観察し、流入形態の推定が可能な特徴を持つものの分析を行った。

今回の調査結果として、東海の中でも特定の地域との関係をうかがうことのできる資料を確認することができた。下呂石製の石器のうち、人工的に剥がされたものでなく自然状態の面を残すものがある。このような面を原礫面といい、原礫面を観察することでおおよその産出地を推定することができる。北陸で確認した下呂石の原礫面は産出地付近ではなく濃尾平野付近で採集されたものと推定され、北陸地方と濃尾平野との関係性がうかがえる（図1）。



図1 原礫面を持つ下呂石剥片

また、東海地方に特徴的な石鏃の出土を確認することができた。東濃が分布の中心であると考えられる部分磨製石鏃（図2）と下呂石原産地付近で製作された可能性のある有茎長身鏃（図3）を今回の調査において確認した。これらの石器は確実に製品となったものが運ばれたとはいいがたいが、下呂石との関連が強く遺跡内で製作されたと考えにくいいため、東海で製作された石鏃が当時の北陸において大きな力を持っていた御経塚遺跡などに持ち込まれた可能性が考えられる。

今回の調査では、縄文時代における東海と北陸の関係を考察するうえで重要な証拠となりうる資料を確認することができた。しかし、今回の調査のみでは十分ではなく、今後さらなる資料集積を続けていく必要がある。



図2 下呂石製部分磨製石鏃



図3 下呂石製有茎長身鏃

謝辞 今回の調査におきましては、富山県埋蔵文化財センター岡本淳一郎氏、石川県埋蔵文化財センター山川史子氏、野々市市教育委員会腰地孝大氏には資料見学上の便宜や多くのご教示を賜りました。末筆ながらお名前を明記して謹んでお礼申し上げます。